

英語と格闘した半世紀

協 田 勇

昭和55年2月13日、私は「英語と格闘した半世紀」という演題で小樽商科大学定年退官の最終講義を行なった。仰々しいタイトルを掲げながら、内容は不満足なものであったと反省しているが、一介の平凡な英文学徒が、英語に取組みはじめてから半世紀の間、どのような軌跡をたどり、現在どのような所まで到達したかをお伝えし、春秋にとむこれからの世代に、多少でも試行錯誤の少なからんことを望んで、自分の体験を語りたいというのが私の企図するところであった。

私は旧制の庁立旭川中学校（現在の道立旭川東高等学校）において、はじめて英語と接触した。その時のみずみずしい感激は今なお記憶に鮮烈に残っている。中学、高校の英語教師と席を共にする時、私の強調してやまないのはこの点で、この導入期の指導の成否がその後の語学力がほんものになるかどうかの分岐点と信ずるからである。幸いにして、今から考えてもかなりの力をそなえた英語教師のきびしい訓練をえて、英語に取組む基礎的姿勢が確立して行っただと言える。東京大学英文科出身のある教師から一番強い影響を受けたように思う。生涯つきあうことになる *Pocket Oxford Dictionary* の使い方の手ほどきを受けたなどは、大変な収穫であった。

結局、英語を生涯の仕事ととして選び、私は東京高等師範学校文科三部（英文科）に進学した。この学校の教授陣の真価は、かけだしの英語学徒にわかるはずはなかったが、日本の英語学、英文学、英語教育の歴史に偉大な足跡を残している錚々たる学者たちであった。日本人教授には、石川林四郎、青木常雄

寺西武夫、大塚高信、篠田錦策、飯島東太郎先生などがおり、外国人教師には日本の英語教育に絶大な貢献をした Hornby 氏がいた。受験英語で培かれた「読む」、「書く」技能はある程度持っていたと思うが、入学後は、英語の四技能の徹底的な鍛えなおしをされたと言ってよい。Palmer によってはじめられた Institute for Research in English Teaching に関係していた教授も多く、日本人教授の中にも終始英語のみで授業する方もいるというはげしきで、有無を言わせず引張って行き、一角のものに仕上げようという気迫に満ちた指導であった。高師二年の夏、東京で世界教育会議が開催され、その通訳・ガイドに選ばれるまでになれたのもこの hard training のおかげであった。その後、三年修了で東京文理科大学文学部英文科に進学した。専任教授には、石川林四郎、神保格、福原麟太郎、大塚高信などの諸先生がいた。この英文科には、学問的にリベラルな気風があり、非常勤の形で諸大学の優れた学者を惜みなく招聘していた。斎藤勇、土居光知、西脇順三郎、竹友藻風というような碩学の馨咳に、年間講義、集中講義を通して、接することができたのも、そのあらわれと言ってよかろう。私自身は英文学を指向していたが、この大学には英語教員養成が根底にあった故か、英語学の学習にもかなり力点をおいたカリキュラム構成であった。明治、大正、昭和初期までのわが国の英学者には、文学にも語学にもすぐれた学者が多かったが、その傾向のなごりが、この大学の教授陣に、またその教授法にも見うけられた。

一人の人間の一生を左右するような私淑できる人物との出会いがあるとすれば、私は福原麟太郎教授の名をあげるに吝かでない。日本文学は言うに及ばず東西の学芸に通暁しているこの英文学者から、英文学の本質、否文学そのものについてどれ位眼を開かれたかは一言にして尽すことは難しい。秀れた学者必ずしもよき教育者にはあらずと巷間伝えられるが、この先生こそ、その両面を具備された稀にみる逸物であったと信じている。その門下から、英語英文学界にいかにも多く衣鉢を継ぐ学者が輩出しているかを見れば、その間の消息が自明の事実として理解されるであろう。この大英文学者も、修業時代、岡倉由三郎なる傑物から指導をうけて誕生していることを考えると、生半可な研究では、

この道は物にならぬことを今更のように知らされるのである。

さて、学部時代の一つの思い出として、日米学生会議への参加があげられる。日本全国の大学、専門から選抜された学生が、米国の諸大学の代表学生と一年ごと交互に一堂に会し、政治、経済、教育、文学などのテーブルに分かれ意見の交換をし、親善をはかるのが目的であった。運用能力のテストには、またとないよき機会であった。それぞれのカラーを持った大学の学生の中に、多くの友人を得ることができ、視界の広がる思いを体験した。当時東京大学の法科の学生であった宮沢喜一氏などと一緒に運営に当たったことなど忘れ難い。

学部の卒業に当り、私は卒論のテーマに Aldous Huxley を選んだ。昭和10年代の日本には Huxley の研究書などほとんどなく、それだけにやりがいありと判断した結果であった。この欧米を代表する知性と評価の高かった作家に生意気ざかりの私が魅力を感じたことも他面の理由があった。「Aldous Huxley の思想の一考察」なる英文論文をどうやら仕上げたのは、日本があつた不幸な大戦に突入した昭和16年12月8日の頃であった。

高師、大学を通じて学んだことを総括してみると、一つには正確にテキストを読みこなす習慣をつけたこと、二つには研究の方法論を私なりに身につけたこと、三つには語学教育における周辺知識の必要性を知ったということになる。

卒業後、旧制の中学校に奉職し、10年間職業としての英語教育にたずさわつたのであるが、私の教授法は、Palmer Method を加味した私独自の method であったと言える。若さに物を言わせた私の指導についてきた生徒の中には、現在大学教授として英語文学者の道を歩んでいるものも何人かいるし、学者たらずとも、語学力を駆使して、実業界その他で国際的舞台上で活躍している者もかなりの数に達し、長期的な展望に立って考えると、私の教育が無駄ではなかったとひそかな教師冥利を感じている。

昭和24年、米国の特段の配慮により、渡米留学の道が開かれた。これがフルブライト留学生の先駆をなすガリオア資金による留学制度である。120名採用の第一回目の試験に日本全国から6,000名の応募者があつた。北海道から2名合格、私もその一人にはいる幸運を与えられ、25年7月太平洋を渡り、イリノ

イ大学、ミシガン大学の大学院で一年間研修の運びとなった。ミシガン大学では、Fries, Pike, Markwardt, Lado 博士などから新教授法をみっちりたたきこまれた。この試験に母校の卒業生で合格したものが約一割に達したのであるが、学生時代の all-round な drill のたまものであると言ってまちがいはなからう。この第一回目の留学生の帰国あたりから、Michigan Method, 別名 Fries Method が澎湃として、わが国の津々浦々まで浸透して行った。私は Fries Method の長所は教授法に取入れたが、よしあしは別として、Fries 信徒にはなりきれず、自分独自の教授法を踏襲し続けた。昭和27年、招かれて北海道教育大学に移り、中学校、高等学校の教師の養成にたずさわることになった。この大学では9年間勤めたのであるが、英語教育というのは単なる言葉の教授ではなく、語学を通し人間教育を行なうことを信念とし、その考え方もとづき教育を続けてきた。当時の教え子の中から、海外派遣教員に選ばれた者も多く、北海道英語教育の中堅として、現場を守ってくれていることは心強い。こちらは時々カンフル注射をし、おかえしに現場の情報を送ってもらっている。Huxley 研究にはじまった私の二十世紀英文学の研究は、大学卒業後も続いていたが、米国から帰った頃から、研究対象は Somerset Maugham に向ってきた。

昭和36年語学教育の伝統を誇る小樽商科大学に配置換えとなった。本学は東京高師、東京文理科大とは縁が深く、先輩の速川浩、太田朗氏などの後を襲うてその榮譽を傷けまいと微力を傾ける決意をもって教壇に立つことになった。爾来19年間、私の生涯で一番長く在任する職場となった。専門分野は申すに及ばず、他の分野の優れた学者たちと親しく交流できたこと、また多くの potentiality を持った学生と接することができたことなど思うとしみじみ自分の幸福であつとを知らされ、忘れ難い19年間であつたとなつかしく回想する。『人文研究』その他に発表した論文は、いずれも力足らず、自分ながら不満のものであるが、私なりに Maugham へのアプローチを記してきたつもりである。

教壇生活40年を回顧して、自分は何をやってきたかと考えてみると、忸怩たることのみが表に出てきて、これと言った業績らしきものがないのが嘆かれる。

蟹は甲羅に似せて穴を掘るの諺通り、私の能力以上でも以下でもなかったとしか言いようがない。大学人をかりに研究者と教授者の二つに分けるとすれば、私は完全に教授に傾斜していたとすることができる。英語という襦と取組んで半世紀、今だにその本質をつかめずにいる有様で、これからの私の研究生活には依然として格闘の続くことが予想される。Maugham 研究は、今迄の所主とし長編、短編の小説であったが、日本の Maugham 研究家が比較的手がけていない comedy of manners としての彼の劇作に手をつけてみたいと計画している。

さて末筆になったが、その名に値しない名誉教授の称号をうけ、その上記念論文集まで出していただくことに、心からなる感謝の意を表し、この拙文をおえる。